

飛鳥池遺跡発掘調査報告

本文編〔I〕

第I章 序 言

本書は、奈良県高市郡明日香村大字飛鳥・岡に所在する飛鳥池遺跡・飛鳥池東方遺跡において奈良県の委託により、奈良国立文化財研究所（2001年度以降は奈良文化財研究所、以下同じ）が1996年度から1999年度にかけて実施した発掘調査成果をとりまとめたものである。なお、1991年度明日香村教育委員会との合同調査、1999年度、2000年度の遺跡範囲確認調査の成果も合わせて収録した。

1 調査の経緯

飛鳥寺東南の二つの丘陵ではさまれた谷は、南で二つに分かれている。二本の谷の合流点北側の、谷が最も狭まった位置に土手を築いてつくられた近世の溜池が飛鳥池である。1991年、池の埋立工事の計画が地元でもちあがった。このため1991年3月に明日香村教育委員会が池底の東・西二カ所で試掘調査を実施し、西側のトレンチで遺構と遺物包含層を確認した。これにより、同年4月から奈良国立文化財研究所と明日香村教育委員会との合同調査をおこなった（飛鳥寺1991-1次調査）。調査地は西の谷の北半で、東の谷との合流部に一部かかる場所にあたる。調査の結果、この遺跡が7世紀後半から藤原宮期を中心とした、金属・漆・ガラスなどの多様な生産活動をおこなった工房遺跡であることが明らかとなった。遺跡名は溜池の名をとり飛鳥池遺跡と名付けられた。

飛鳥池遺跡
の 発 見

その後、池は建設残土などの廃棄物が入られ、池東側の丘陵の削平土で完全に埋め立てられた。¹⁾1996年、奈良県は埋立地を中心とし、周辺の一帯も含めた敷地に万葉文化館建設を計画した。これに伴う事前調査は県の委託により、奈良国立文化財研究所が実施することとなった。万葉文化館の中心施設は展示棟と管理研究棟である。展示棟は飛鳥池の西側、管理研究棟は東側に計画されていた。1991年の調査では管理研究棟部分では遺構が確認されていなかったことから、発掘調査は展示棟予定地を中心とし、飛鳥寺1991-1次調査区の南及び北側についておこなうこととなった。

まず最初におこなったのは敷地北部で、展示棟と北側の外構造成部分の調査（第84次調査）である。飛鳥池堤防北側の谷出口部分にあたり、1997年1月から開始したが、複雑な整地土、重複する遺構状況から11ヵ月を要した。この調査で飛鳥寺寺域と飛鳥池遺跡との境界域の状況をつかむことができるとともに、飛鳥寺1991-1次とは異なる遺構の様相が明らかとなった。第

継 続 調 査

飛鳥池東方遺跡

84次調査と併行して、万葉文化館敷地の東半の調査（第86次調査）に7月から入った。飛鳥池東側の丘陵と飛鳥坐神社南の丘陵との間の谷筋で、水路のつけかえと盛土造成がおこなわれる部分である。飛鳥池遺跡の所在する谷筋とは異なることから、遺跡名を飛鳥池東方遺跡とした。谷筋の西寄りの位置に、7世紀中頃から平安時代につづく流路を検出するとともに、その東岸の遺構の様相が明らかとなった。第86次調査終了にひきつづき11月からは、展示棟予定地である西の谷南半部と、2つの谷をわける南側丘陵及び管理研究棟にかかる、東の谷西岸部の調査（第87次調査）をおこなった。調査区は飛鳥寺1991-1次調査区の南に接する。西の谷の工房で金・銀製品や、ガラス玉の他に水晶・コハクなど玉類の生産がなされていたことが新たに明らかになった。この調査では、展示棟予定地南半が地形が高いために、切土工となる計画であったことから、調査区の一部について下層遺構を調査し、古墳時代の遺構が明らかとなった。第87次調査と併行して1998年4月からは第86次調査の成果をもとに、敷地東南部分を中心とした飛鳥池東方遺跡の調査（第92次調査）をおこなった。7月からは第84次調査区と飛鳥寺1991-1次調査区とをつなぐ、飛鳥池北半部の調査（第93次調査）にかかった。この調査では、谷の最も狭まった場所に三条の堀が検出された。堀の南は陸橋で区画された水溜となり、北側と遺構の様相が異なることが明らかとなった。さらに管理研究棟予定地にかかる東の谷の東岸に、金属工房跡が良好な状態で検出された他、飛鳥寺東南禅院所用瓦の窯跡も発見された。そして、出土遺物では富本銭が大きな注目を集めた。

当初の計画では第93次調査が最終の調査であり、万葉文化館の起工式が1999年2月に予定されていた。しかし、これまでの調査成果や第93次調査での工房跡や富本銭の発見によって、県に対して遺跡の保存と建設計画の変更を求める声が大きくなった。こうした状況の中で、県の調整の結果、当初は予定していなかった管理研究棟部分の調査として、第98次調査を1999年3月から実施することとなった。この調査により、谷筋につくられた污水处理施設の状況が明らかとなった他、富本銭の鋳型が発見され、飛鳥池遺跡での富本銭鋳造が確定した。また、1998年10月、飛鳥寺南辺の外郭施設が想定される、敷地北辺でおこなわれた外周擁壁工事の際に、遺構が影響を受けた。このため工事を休止とし、1999年3月から第84次調査区北側を第97次調査として実施し、飛鳥寺南面大垣とその南の道路の状況が判明した。9月に終了した第98次調査の成果により、管理研究棟の建設位置が東に変更され、これに伴う第99-6次調査を11月に実施した。こうして1997年1月に開始した継続調査は終了した。

遺跡範囲確認調査

その後、建築工事が進行していく中、文化庁・県から、遺跡の史跡指定にむけての資料を得るため、遺跡の範囲確認調査が奈良国立文化財研究所に依頼された。これにより、2000年2月～4月に第106次調査として、西の谷の西・南斜面、2つの谷をわける南側の丘陵上の調査をおこなった。つづいて2001年1月～3月には第112次調査として、東の谷筋にあたる旧健民グラウンド敷地内での調査をおこなった。2回の範囲確認調査により工房遺構の西・南へのひろがり確認された。この調査で飛鳥池遺跡の発掘調査は終了した。

国史跡指定

2001年8月、飛鳥池遺跡は史跡指定された。そして9月には万葉文化館が開館した。遺跡は史跡となったが、発掘調査で明らかにされた遺構の保存については問題を残した結果となった。

1) 明日香村教育委員会『明日香村遺跡調査概報 平成4年度』1993年。

2 調査組織

今回報告する調査のうち、飛鳥寺1991-1次調査は、奈良国立文化財研究所と明日香村教育委員会の共同調査で、その他は奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が実施したものである。以下に各次調査の発掘調査担当者名（太字）と現場班の調査員名を掲げ、それ以外の発掘調査関係者は一括して列記する（*は研究補佐員）。

調査次数	年 度	所 長	部 長	調査担当者	調査員			
飛鳥寺1991-1次	1991	鈴木嘉吉	牛川喜幸	花谷 浩	山本忠尚	山岸常人	伊藤 武*	納谷守幸（明日香村教育委員会）
飛鳥藤原第84次	1996	田中 琢	猪熊兼勝	島田敏男	松村恵司	小澤 毅	長尾 充	伊藤敬太郎*
	1997			毛利光俊彦	深澤芳樹	寺崎保広	西口壽生	羽鳥幸一*
				花谷 浩	松村恵司	島田敏男	伊藤敬太郎*	
飛鳥藤原第86次	1997	田中 琢	猪熊兼勝	長尾 充	黒崎 直	西口壽生	水戸部秀樹*	
飛鳥藤原第87次	1997	田中 琢	猪熊兼勝	花谷 浩	松村恵司	島田敏男	伊藤敬太郎*	
	1998		黒崎 直	小澤 毅	巽 淳一郎	千田剛道	佐川正敏	鈴木恵介*
				安田龍太郎	深澤芳樹	長尾 充	水戸部秀樹*	
飛鳥藤原第92次	1998	田中 琢	黒崎 直	長尾 充	安田龍太郎	深澤芳樹	水戸部秀樹*	
飛鳥藤原第93次	1998	田中 琢	黒崎 直	花谷 浩	松村恵司	島田敏男	伊藤敬太郎*	
				巽 淳一郎	寺崎保広	小澤 毅	鈴木恵介*	渡邊淳子*
飛鳥藤原第97次	1998	田中 琢	黒崎 直	毛利光俊彦	西口壽生	小野健吉	田福 涼*	
	1999	町田 章						
飛鳥藤原第98次	1999	町田 章	黒崎 直	花谷 浩	松村恵司	長尾 充	伊藤敬太郎*	播磨尚子*
飛鳥藤原第99-6次	1999	町田 章	黒崎 直	伊藤敬太郎*	松村恵司	花谷 浩	長尾 充	播磨尚子*
飛鳥藤原第106次	1999	町田 章	黒崎 直	安田龍太郎	深澤芳樹	小池伸彦	播磨尚子*	加藤貴之*
飛鳥藤原第112次	2000	町田 章	黒崎 直	松村恵司	花谷 浩	箱崎和久	渡邊淳子*	西川雄大*

相原嘉之*、荒木浩司*、井上直夫、岩永省三、大脇 潔、川越俊一、肥塚隆保、佐伯博光*、立木 修、玉田芳英、中村一郎*、西村 康、橋本義則、福山比呂美*、宮川伴子*、村上 隆、村田裕一*、山下信一郎

奈良国立文化財研究所事務局：

桜井雅樹、吉岡佐和子、稲垣耕正、木寅 貢、平山重利、松本 誠、松本正典、山田昇司

3 報告書の作成

発掘調査の当初の計画では、1998年度の飛鳥藤原第93次調査終了後に報告書の作成に取りかかり、2002年度に刊行する予定であった。しかしながら調査の進展にともなって、当初計画になかった管理研究棟予定地の発掘調査の必要性が生じ、東の谷東岸の工房跡の広がり、東の谷の水処理施設の解明を目的に、1999年度に飛鳥藤原第98次調査を実施することになった。半年に及ぶこの調査で、富本銭の鋳型が発見されるなど重要な成果が得られたが、谷に堆積する大量の炭層（工房廃棄物層）を取り上げたために、その水洗と遺物の選別作業が整理作業全体を圧迫することになった。

また、調査の進展によって、飛鳥池遺跡の歴史的・学術的重要性が広く社会に認知されるようになると、遺跡の保存を要望する声が全国的に高まり、万葉文化館の建設計画と遺跡保存の調整が求められる事態となった。紆余曲折はあったものの奈良県と文化庁の協議によって、管理研究棟の建物配置の変更と、遺跡の史跡指定の方向性が固まり、史跡指定に向けた遺跡の範囲確認調査の実施が急務となった。このため整理作業に優先して、2000年と2001年に2度にわたる範囲確認調査（飛鳥藤原第106次調査・第112次調査）を実施した。こうした状況の変化によって、整理作業計画も大幅な見直しが必要となり、報告書は2004年度に刊行の予定となった。

報告書の編集方針は、今後の各方面での研究の進展に役立てるため、可能な限り十分な資料の提示をおこなうことにした。しかしながら発掘調査で出土した土器や瓦、木製品などの遺物量は、他に例がないほど膨大であり、土のうに入れて取り上げた工房廃棄物（炭層）が最終的に10万5千袋に達するなど、出土遺物の整理作業は大幅に遅延する事態となった。

さらに報告書の作成作業が進むと、当初に予定した分量を大幅に超過する大部の報告書となることが予想された。このため、本文編を3分割し、本文編〔Ⅰ〕を生産工房関係遺物（本書）、本文編〔Ⅱ〕を土器・土製品、本文編〔Ⅲ〕を遺跡・遺構として刊行することにした。

資料整理については、遺構関係を遺構調査室、瓦埴類、土器・土製品類、木製品、金属製品、石製品を考古第一・第二調査室がおこない、木簡・墨書土器の釈読は史料調査室がおこなった。木材の材質、年輪年代の調査は光谷拓実（埋蔵文化財センター）が、飛鳥寺1991-1次調査の遺跡探査は西村康（埋蔵文化財センター）がおこなった。ガラス製品の分析と石材の鑑定には、肥塚隆保（埋蔵文化財センター）の協力があり、小野澤亮子と辻広美が自然科学の分析作業を補助した。

また、鉛同位体分析による産地同定を国立歴史民俗博物館の齋藤努氏に依頼した。

足かけ5年に及ぶ発掘調査の概要は、調査の翌年度刊行の『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』・『年報』・『紀要』において報告したが、検討時間が限られた中での不十分な内容の部分も多い。本報告書の作成にあたっては、調査部を中心として検討会をおこない意見の調整をおこなった。調査時点での見解や、概要の報告段階での解釈と異なる点もあるが、本報告をもって正式見解としたい。

1. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章 序 言

安田龍太郎

第Ⅱ章 調 査

1 調査地域（1 Cを除く）

2 調査の概要

3 調査成果の公表

4 調査日誌抄

以上 安田龍太郎

1 C 測量と地区割り

内田和伸

第Ⅳ章 出土遺物

1 生産工房関係遺物

A 炭層の層序、B 金・銀、C ガラス・宝玉類、

D 銅製品、E 富本銭、Gv 石製埴塼、

H 鋳型等、Oi～iv 漆工関係遺物、P 様

以上 松村恵司

F 鉄製品、Gi～iv 埴塼・取瓶・被熱土器、

I 韃羽口、J 工房関係特殊土製品、

K 炉壁等、L 鉾滓、M 鉾石・鉾物

以上 小池伸彦

N 砥石・石製品

渡部圭一郎

Ov 漆付着土器

渡辺丈彦

2 木製品ほか

富永里菜・長谷川 透・

松村恵司

3 瓦埴類

A・B 軒丸瓦・軒平瓦、C・D 丸瓦・平瓦、

F 面戸瓦、G 熨斗瓦、H 隅切平瓦、

I その他の道具瓦、J 文字瓦・ヘラ記号瓦など

以上 花谷 浩

E 垂木先瓦・鬼瓦・鴟尾

小澤 毅

K 埴仏、M 土管

小谷徳彦

L 埴

山崎信二

4 木 簡

A・B・Cii～vi・D・E

市 大樹

Ci

竹内 亮

5 建築部材

箱崎和久

6 石器・石製品

A 石器

渡辺丈彦

B 石製品

渡部圭一郎

7 その他の銭貨

松村恵司

第Ⅴ章 自然科学による分析

1 飛鳥池遺跡出土金属製遺物の科学的調査

村上 隆

2 飛鳥池遺跡出土ガラスの科学的調査

降幡順子

3 飛鳥池遺跡出土遺物の鉛同位体比測定結果

齋藤 努

第Ⅵ章 考 察

1 富本銭の鋳造年代と銭文ならびに鋳銭技術

松村恵司

2 瓦からみた飛鳥池遺跡と飛鳥寺の禅院

花谷 浩

3 鉄滓・羽口・炉からみた鉄鍛冶工房の性格

小池伸彦

4 木簡と遺跡

A 木簡からみた飛鳥池工房

市 大樹

B 飛鳥池遺跡北地区出土木簡と飛鳥寺

竹内 亮

2. 遺構・遺物の写真撮影は井上直夫がおこない、中村一郎と岡田 愛が協力した。
3. 図面・図版・挿図・表の作成は各執筆者があたり、以下の各氏の協力を得た。
赤松一恵、飯田真理子、石田由紀子*、稲田登志子、乾 陽子、井上富美子、小野木ルリ子、
笥 和也*、氣賀澤博徳、木瀬智晴、黒坂貴裕、小島美紀、笹 恵子、佐々木聖子、玉木学恵、
戸根比呂子、中川あや、中村明子、野瀬倫子、東村純子、平山美江、堀川里美、増田朋子、
宮原智美、六車美保、森田和世、吉江 崇（*は研究補佐員）
4. 奈良国立文化財研究所、奈良文化財研究所の出版物に関しては下記の略称を使用した。
機関名についても、奈文研と省略する。
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26』 → 『藤原概報 26』
『奈良国立文化財研究所年報 2000-II』 → 『年報 2000-II』
『奈良文化財研究所紀要 2001』 → 『紀要 2001』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV』 → 『藤原報告 IV』
5. 遺構図の座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系による。高さは、東京湾平均海面を基準とする
海拔高であらわす。2002年4月1日からは、改正測量法施行に伴い、世界測地系に移
行することとなったが、発掘調査は全て日本測地系に基づくため、本報告の平面座標は
日本測地系で表示し、一部世界測地系の数値を（ ）内に示した。
6. 発掘調査で検出した遺構は、遺構の種別を示す以下の番号と、一連の番号との組み合わ
せにより表記した。本遺跡の地区割りは大地区が5BAS・5AKAで一部5AMEを含むが、
遺構番号は5BASと一連の番号を付すことにした。
SA（塀）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）
SG（池）、SK（土坑）、SS（足場）、SY（窯）、SX（その他）
7. 本書には「溶解」と「熔解」の語が混在するが、敢えて統一はしなかった。また、遺物
の寸法表記で「厚さ」を「厚」と略記した部分がある。
8. 本書（本文編〔Ⅰ〕）は、当初の計画では、図版編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅱ〕とともに、2005年
3月に刊行する予定であった。しかしながら、生産遺跡特有の複雑な遺構の分析作業に
手間取り、遺構の取りまとめや時期決定、遺構変遷の解明に多大な労力と時間を要する
こととなった。また、人事異動等により執筆の一部と編集作業が大幅に遅延し、刊行は
2021年12月となった。
図版編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅱ〕については、印刷・製本が先行して完了したものの、本文編
の完成を待って公表することとしたため、未公表のまま研究所の収蔵庫に保管すること
とした。したがって、図版編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅱ〕はこのたび完成した本文編〔Ⅰ〕と
一体の報告書として公表するが、図版編〔Ⅰ〕、図版編〔Ⅱ〕の印刷・発行は2005年、
本文編〔Ⅰ〕の印刷・発行は2021年と、それぞれ異なる表記の奥書となった。ただし、
本文編〔Ⅰ〕の内容は基本的に2005年当時の見解のままであり、その後の研究の進展は
反映していない。執筆分担者は、齊藤努氏（国立歴史民俗博物館）を除き、すべて奈良文
化財研究所に在籍したことのある者である。
9. 2005年度以降、奈良文化財研究所の刊行物やウェブサイト上に、『飛鳥池遺跡発掘調査
報告』（奈良文化財研究所学報第71冊）を刊行済図書として掲載してきたが、事実とは異なる
情報発信であり、ここに深くお詫び申し上げる次第である。